

山形県空手道連盟
「べにばな国体」20周年記念祝賀会

「べにばな国体」を振り返って

記念講話：山形県空手道連盟会長 飛鳥宗一郎

と き 平成24年10月14日(日) 午後4時

ところ ホテルキャッスル(山形市十日町4-2-7)



一丸となって 取り組んだ11年

— 史上最高得点で優勝を勝ち取る —



会 長
高橋 和雄



理事長兼強化本部長
飛島宗一郎



指導部長
安達 剛

はじめに

「べにばな国体」が冬季、夏季及び秋季の各競技とも真剣な取組みが展開され、開催前の予想を大きく上回る得点で天皇杯、皇后杯を獲得できたことは輝かしい努力の結晶として共に喜びとするところです。

空手道競技においても、競技会初日に天皇皇后両陛下を会場にお迎えして親しく御観戦仰ぐ光栄に浴し、関係者一同かつて無い栄誉となりました。また、全員入賞と史上最高得点で種目総合優勝を飾り、チームの結束とそれまでの強化策が効を奏してのゴールインを大きな喜びとし、競技会運営の大成功と併せ責任の一端を果たし得たことで安堵している。

これも偏に、県当局、県体育協会、並びに会場地である天童市実行委員会など、関係機関の御指導と県民の熱い御声援の賜物であり、深甚なる感謝の意を表します。

顧みれば、第47回国体の本県開催が具体化したのは昭和56年のこと、奇しくも空手道が国体正式種目の仲間入りした「びわこ国体」の年でありました。以来11年間、あれこれ不安と苦勞の繰り返しばかりと思っていたが、過ぎて心中には『真剣に取り組んだ一日一日は、人生の中で最も充実した歳月を歩んでいた。』と……。こう言できるのは筆者のみで無いはずだ。

強化の歩み

1 取り組みの背景

空手道競技会場は、昭和60年3月天童市と発表され、「山形県総合運動都市公園」総合体育館に決定した。当時連盟側に示されたのは体育館の青図面のみであり、施設の全容など推し量りようもなかった。

昭和61年11月、第1回中央競技団体正規視察が実施



優勝5種目を含む全種目入賞で総合優勝、喜びに沸く選手団

されたが、その時点でさえ粗削りされた地肌むき出しの荒地であった。

しかし、年を追うごとに目に見えてきたのは膨大な主会場地の概観だが、この総合体育館を空手道競技会場に指定されたことを大なる誇りとし、種目優勝は至上の命題として強化に取り組むことに結びつくことになる。

そして、これらの背景と連盟運営の歩みが完全に一致した形で進行し、昭和60年度総会（昭和60年2月）において次の議案が決定された。

1) 組織の強化と事業の活発化

- ◎ 強化本部・審判部・指導部の制定
- ◎ 底辺拡大、ジュニア大会の開催

2) 競技力向上の方針

- ◎ 長期的・短期的強化方針
- ◎ 強化選手の指定

3) 財源確保

- ◎ 基金委員会の発足
- ◎ 基金造成開始

これらのうち、選手強化に関する部分を抜粋すれば以下のとおりで、以後一貫して「べにばな国体」まで継承するのである。

ア 強化本部長を総指揮者とし指導の一貫体制

イ 年次的に選手構想を考慮して国体選手を選考

ウ 広く県外からも有能選手を求める

エ 県外コーチの招聘

オ 県外チームと交流の活発化

カ 東北総体の好成績確保

キ ジュニア選手の育成強化

ク 指導者のレベルアップと監督の年次的構想

ケ 全国審判員合格者の増加

以後、毎年の総会でこの方針に部分的修正がなされ、

更に、昭和63年度総会で「重点強化24ヵ月体制」が方

針に加えられた。即ち、「べにばな国体」2年前までは徹底した基礎鍛練期とし、福岡国体以後の残る2年間は総合優勝を可能とする強化の手立てを完全消化することとした方針である。

更に、平成2年度から、「総務渉外」「財務」「競技力向上」及び「競技運営」の4委員会からなる、特別委員会を設置した。

2 石川国体までの歩み

これらの方針を受けた各国体の成績だが、昭和60年鳥取国体は少年男子第4位。61年山梨国体は成年男子組手重量級第2位、少年男子組手第3位で総合8位。62年沖縄国体でも組手に複数入賞と順調に推移したか〈成年男子〉（その1）



男子監督

安達 剛
安達接骨院

コーチ

菊地 健治
菊地ボーリング

組手無差別級

瀬野 利幸
川崎電気㈱

組手重量級

飛鳥 康弘
県総合運動都市公団公社

に見えたが、63年京都府から平成2年福岡国体までの3年間は善戦むなしく入賞に見放され、「型」3種目は参以来全然入賞に手が届かないなど、前途に大きな不安を残したが、石川国体では、型選手を含む全員がベスト16位以内まで勝ち残り前進があった。石川国体の最終結果は、少年男子組手に渡部泰博（東海大山形高校）が優勝、成年男子組手中量級に斎藤彰宏（県スポーツ振興基金）が第3位に入賞、総合成績第7位を確保したのであった。しかし、24ヵ月体制の中間点総括として多くの未解決課題は残したが、希望をもって強化に取り組む成果となった。

3 専任コーチの指定

県競技力向上対策本部事業の一つとして、平成2年度より指定することになり、これまでも当方選手の育成強化に最も密接に携わってくださった、日本大学空手部監督の田邊文博氏に依頼し、快くお引き受けいただいた。

当方のコーチングスタッフ及び選手からの信頼も厚く、学生空手道界最強豪の日本大学との有効関係を一層深め、合同練習の実施、夏期合宿練習の招聘などを通じ適切なアドバイスを受けることができた。競技力向上とチームワーク強化に抜群の指導力を発揮され、福岡国体以降国体現地における適切な助言などと併せ、優勝成績達成に大きく貢献していただいた。



選手代表宣誓の飛鳥、上妻両選手

4 アドバイスコーチの採用

型競技は、必ず得点に結びつけなければならないとの考えから、平成3年10月専任コーチから助言を受け、型選手に対するアドバイスコーチが必要との結論に達し、型指導の世界的権威である林輝男氏（林派糸東流会宗家）に依頼。3年11月以降毎月選手の派遣と招聘を繰り返し、型3選手の型選定と実技指導をお願いし、天皇杯・皇后杯獲得に大きく貢献していただいた。

5 会場の完成

県総合運動公園の諸施設は平成3年6月に落成した。これらの総合施設は来県する他チームの目を見晴らせ、当方大きな誇りであった。

それまで転々としていた練習場確保の悩みが一気に解決され、オープン以来、武道館の「剣道場」を練習場として優先使用できる有り難さを心底から感じた。空手道競技用マット2面を搬入。好環境のもと練習に専念し、県内合宿練習も有効に実施できた。

6 最終年強化の特徴

1) 候補選手の指定

石川国体を終了し候補選手はほぼ確定した。従前方針どおり各種目に複数配置を行い、平成3年度後期強化指定選手及びコーチングスタッフとして発表した。

2) 石川国体から年末まで



組手重量級決勝戦、飛鳥・国分（千葉県）の対戦

組手選手は、他県有力選手を想定した練習を開始した。また、型選手は決勝戦で用いる型の選定と練習に入ったが、未だ確定できない悩みがあった。

3) 平成4年度の県外選手団との交流など

ア 当選手団の強化策について評価し、来県した選手団は8チーム、10回。

イ 平成4年1月以降の9カ月間における県外遠征は27回、対戦したチーム数は12チーム。

ウ 平成4年1月以降の県外コーチ等の招聘は、アドバイスコーチを含め12回、述べ19名。

4) 選手の選考

〈成年男子〉（その2）

〈少年男子〉



組手中量級
齋藤 彰宏
飛鳥スポーツ振興基金



組手軽量級
横田 和浩
天童高校教員



型
丸山 秀人
川崎電気㈱



コーチ
小笠原 博
東海大学山形高校教員

6月21日に第1次選考会（県総体）を実施し、6月28日に最終選考会、7月3日に拡大強化本部会議を開催し、選手並びに型試技、組手練習補助選手を内定し発表した。

5) 選手の勤務と練習について

本年3月以降、正選手候補は運動公園の「剣道場」及び山形市内の道場を使用し、一日の休みもなく練習スケジュールを消化、選手の内定した7月からは協力企業等勤務先及び在学学校から理解を得ながら、仕上期における十分なトレーニングと練習が可能であった。

特に、本番競技会場（メイン競技場）での練習は会場の雰囲気慣れさせるのに効果があった。

6) 東北総体の結果

出場の可否（あるいは正選手の出場）は当方の判断に任されていたが、「べにばな国体」前最終の公式戦であることから全正選手を出場させて臨んだ。5種目に1・2位を独占し、短期間で急上昇したのは少年男子組手で、1回戦でインターハイ第3位宮城県選手を気迫で圧倒、この種目2年連続本県選手同士の決勝戦となる。不安を残したのは成年男子組手軽量級、同無差別級及び成年男子型で、重点強化課題として残りの期間対策することとした。

7) 獲得得点の目標

県競技力向上対策本部から指定された目標は、パーフェクト点数である72点の60%で43点。大会直

前に獲得可能と分析したのは54点75%であった。

8 大会直前の対策等

1) 選手団の宿泊

選手団は9月28日から事前合宿に入った。競技会終了まで長期に及ぶため、日常生活と余り変化のない環境を重視し、天童市「都旅館」を貸切りでお願いした。

2) 専用練習場の確保

他県選手の練習場はサブアリーナである。しかし、本県チームの必要条件確保には、他チームと隔離した専用練習場の確保が必要と判断し、プール会議室2室を占有。練習調整は勿論対戦研究、怪我治療など全て専念できるよう措置した。

<少年男子>

<成年女子>



組手
吉田 俊英
東海大学山形高校



女子監督
深瀬 久男
南深瀬久米蔵商店



女子コーチ
田鎖 光雄
東南村山地方事務所

3) 天皇皇后両陛下の御観戦

競技会初日5日の午後、両陛下の御臨席を仰ぐことになり、競技は少年女子型を御観戦、御休憩時の組手に成年男子組手の4選手が競技出演した。

べにばな国体での活躍

[プロローグ]

前日の総開会式とは打って変わった静かな秋晴れ朝、嫌が上にも緊張は高まる中、いよいよ大会の幕は切れて落とされた。

専用練習場で最終の全体ミーティング。と言うより最後の進撃の誓い。強化本部長と専任コーチ、そして監督から不退転の檄。

4千人余の観客席は随分と埋まっている。整然と入場行進は続き本県チームは最後の入場。選手代表宣誓は飛鳥康弘(成年男子組手)と上妻千華(成年女子型)、力強く宣誓はなされ万雷の拍手。

[競技の模様]

第1日目……

個人種目のみで、成年男子無差別級は1回戦、残り2回戦まで進行する。第1日目はどの選手も緊張の度合いが強い。組手は、成年男子軽量級横田は、2回戦で石川国体第2位の四宮選手(石川県)を大差で破

碎。少年男子吉田、無差別級瀬野も大差。中量級齋藤と重量級飛鳥は絶好調、相手を寄せ付けない。

型競技のトップは少年女子から。競技途中から天皇皇后両陛下が会場にお入りになられる。1階2階の観客席とも満席、通路も人々々。熱気満々の中で競技は続けられ、選手も千載一遇のチャンスを淡々と闘いに耽り力と美の結集へと…。西掘の出場順は予選Bブロック22番、残念ながら天覧の機会はなかった。

型3種目いずれも予選各組第1位で通過。堅さも見られない、集中力はまずまずの出来栄。

天皇杯のライバルと目される東京都が1日目で中量級と重量級を落とす。

第2日目……

組手、無差別級2回戦から開始、瀬野は必死に勝ち上がる。残る3回戦も気力充実全員が勝利となる。

残る午前中の競技は、少年女子型2回戦と組手個人戦の準々決勝まで。

少年女子西掘は鍼治療で腰痛を抑えて奮闘、型はこの回戦から得点が決勝戦まで持越し(加算)となる重要な場面である。「五十四歩」が見事に決まって22.6点、第1位で通過しチーム内で決勝進出第1号となる。しかし、第2位駒山(福岡)との差は僅かに0.1点。

次いで、組手の準々決勝となる。少年男子吉田は尻上がりに好調、濱(岐阜)を6-4で取り準決勝に進出。成年男子軽量級横田は藤井(山口県)と対戦、相手は本年度の学生チャンピオンで最も警戒を要する選手。しかし、横田は好調にポイントを重ね5-3とリード。誰しも横田の勝ちを信じたその時、一瞬の心の隙を突かれた感じで3ポイントを連続失い、5-6で敗退。第5位入賞に止まる。齋藤、飛鳥、瀬野それぞれ大差で準決勝進出を決める。

午後は団体戦の開始。初戦は神奈川県、飛鳥・齋藤・瀬野のオーダーで臨む。2回戦は長野県、左脛肉離れ障害を持つ飛鳥を休ませ午前中に敗退した横田を起用。3回戦岡山県といずれも3-0の快進撃となる。飛鳥と横田は何時でも交替可能な状態で、どこまで横田を使えるかが最終成績に影響する重大事である。

成年女子型2回戦、世界第1級レベルの三村(長野県)・横山(兵庫県)が出場するこの種目は、この2名を除く選手の力量は全く接近している。上妻は「泊パッサイ」を無難に演武したが、殆どの選手が最も得意とする型を演武してくるこの回戦では苦戦余儀ない。22.5点で第3位となったものの、第1位三村(長野県)との差は0.3点、第2位横山選手(兵庫県)との差は0.2点と大きい。しかも第3位は同点が3名である。とも

かく決勝進出を決めたのは幸いである。

成年男子型2回戦、このグループに本命はいない。丸山にも十分勝利のチャンスはある。「五十四歩」を無難にまとめ22.8点、第2位相原選手（奈良県）との差は0.1点だが、2回戦第1位で決勝進出となる。

ようやく第2日目は終わった。これで全員の入賞は決り、成年男子軽量級を除く全員が第3日目に駒を進めた。気になるのは総合優勝である。この日東京都は少年女子型を落としたものの6種目を残している。当県の残りは8種目だが組手準決勝を全部負け、東京都が勝ち上がれば逆転もあり得る。

しかし、この夜筆者の種目別分析から、東京都の最終得点は32～34点、当県は悪くても43点、天皇杯は播

〈成年女子〉

〈少年女子〉



型
上妻 千華
日本大学



型
西堀 裕子
天童高校

ぐまい。皇后杯も、成年女子の第1位長野県は不動として、長野県の少年女子は第6位同点通過であり、獲得の可能性は非常に大きい。選手に対して未だそれを言える段階ではないので、決して気を緩めないことを指示する。一晚中点数計算のみが頭の中を過ぎり、眠りにつけない。

第3日目（最終日）……

午前の最初は団体戦準々決勝、同じ東北で3年後の国体開催が決定している福島県である。東北総体で勝っているが、決勝進出を可能にするにはこの対戦が天王山となる。先方横田は二瓶に負け、中堅齋藤は可部に勝った。勝敗は大将戦に掛かり、瀬野が寺田に接戦にすえ勝利を収めやっとのこと準決勝進出が決まった。

いよいよ組手個人戦の準決勝が開始される。戦前は半数は敗退するのではと予想していたが、この日は勢いが違っていた。いずれも鬼神の憑いた如く接戦を難無く勝ち抜き4種目が決勝進出となる。

- ☆ 少年男子組手 吉田5-2中島（鹿児島県）
- ☆ 成年男子中量級 齋藤6-4高山（山口県）
- ☆ 成年男子重量級 飛鳥6-5泉川（沖縄県）
- ☆ 成年男子無差別級 瀬野6-4島村（広島県）

次いで、団体戦の準決勝は4年後の国体開催で強化に奮闘している広島県である。負けなことを確信し



少年女子型、西堀裕子奮闘の模様

て見守る。先鋒と中堅で勝負を決め2-1で勝ち。

型の決勝戦が開始される。プレッシャーのあまり型を違われたら大変、忽ちにして得点ゼロとなる。型3競技が終わるまで勝利宣言は出来ない。

☆ 少年女子型決勝

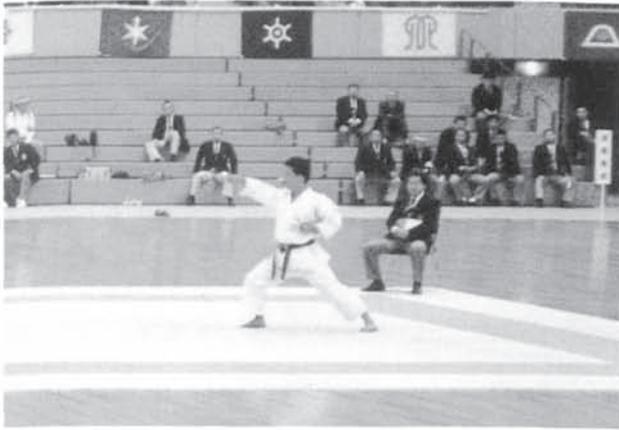
郡司（栃木）、森田（大阪府）と好調さを発揮してくるが、6番目に演武の予選第2位の駒山（福岡県）が絶妙の「エンピ」で25.8点、予選と合計で48.3点と高得点を出してくる。いよいよ最終順番で西堀、腰痛も何のその得意の「スーパーリンペイ」を烈火の気迫で演ずる。得点は駒山と同じ25.8点、予選のリードが物を言い合計48.4点。西堀勝った。華奢な体軀から苦勞の甲斐があった。悠然と勝者の行進で会場を引き上げる。皇后杯を争う長野県瀧沢は第7位に終わる。

☆ 成年女子型決勝

上妻の演技順は後から2番目と好位置。予想どおり三村26.0点、横山25.9点と高得点を出してくる。2回戦で上妻と同点の上農（大阪府）、瀬戸口（徳島県）、林（石川県）の中では、石川国体第3位の林が25.7点と最も高得点。上妻の「ニーパイボ」は練習時を凌ぐ気迫。25.8点と林を上回り、合計48.3点で第3位入賞。ここで、皇后杯は決定した。得点は山形県14点、長野県10点、大阪府8点であった。

☆ 成年男子型決勝

最終順番の丸山は、2回戦トップといってもその差は僅少、このクラスはどの選手も得意型を最後に残している。1番の阿部（宮城県）がアジア選手権者の意地を見せ「スーパーリンペイ」で25.8点と高得点。丸山の前7番の長谷川（山梨県）も25.7点と好調。いよいよ丸山の出番、4月以来練りに練った「ヘイクー」決まったと見えたが得点は25.6点、合



成年男子、丸山優勝を決めた「ヘイクー」

計48.4点で阿部と並んだ。主審は念入りに上下カットされた点数を見比べ、結論は出された。第1位山形県丸山のコール。2回戦でカットされた最低点が0.1点勝っていたのだ。丸山も勝った。

☆ 団体戦決勝

過去10年間で3回の優勝、昨年も第2位の強豪東京都との対戦である。先鋒は山形県齋藤、東京都松枝、競い合いが続く中5-4で勝ち。中堅は横田と重量級の池長、この試合を落とせない東京、負ければ大将戦不利の山形。横田は一時5-2とリードするが追いつかれ5-5となり最後の1ポイントが勝負の分かれ道。勝利の女神は山形に微笑み池長の突きが横田顔をのけ反らせて反則忠告、続いてもう一本痛撃で横田が横転し、反則警告で横田に技有り、大将戦（瀬野-清水）を待たず勝利は決った。



団体戦の優勝を決めた瞬間

☆ 少年男子組手決勝

吉田の対戦相手は、本年度インターハイの優勝者で高校生実力ナンバーワンの強豪筒井（東京都）である。さすが決勝戦、お互いに慎重な試合運びで進行するが、吉田は果敢に攻めのチャンスを窺うものの3ポイントを先行される。最後まで吉田は勝負を

捨てない。吉田が立て続けに上段突きでポイントを返し、1ポイント差に詰め寄るが残り時間僅か3秒。第2位の健闘であった。

☆ 成年男子組手中量級決勝

齋藤の相手は峯（群馬県）、峯は準決勝で世界チャンピオンの安住（宮城県）を破っての決勝進出。日本大学の現役学生で齋藤の後輩である。お互い手の内を十分知り尽くしているだけに要警戒。しかし、齋藤に一日の長、峯は必死に食い下がるが齋藤の読みは深い。6-1で圧勝堂々の優勝だ。

☆ 成年男子組手重量級

飛鳥は準決勝の泉川（沖縄県）戦が山で、競り合いの5-5から最後の1ポイント逆突きが決まり決勝戦へ。一方国分（千葉県）は準決勝で昨年国体の重量級1位と日本選手権大会優勝の藤田（大阪府）を延長戦で退けての決勝戦進出。両者とも苦しみを耐えての対戦である。

しかし、開始直後に国分の蹴りをかわした飛鳥の突きが背部に決まり1本（2ポイント）。ここですっかりパワフルな国分の攻撃が減速された。タイムアップ間近に3-2と接近されたが、最後にもう1ポイントを重ねて4-2と勝った。選手宣誓、会場が勤務先とプレッシャーの中悲願の優勝達成だった。

☆ 無差別級

チームキャプテンの瀬野、大会直前になって調子を上げ意地と粘りの決勝進出。一方内田（京都府）はかつての世界チャンピオンで、同じく世界に名だたる林（新潟県）、清水（東京都）を破って決勝へ。しかし、瀬野の奮闘もここまで、内田の攻撃を凌ぐのに精一杯、良く耐えたが0-3で第2位、よくぞここまで奮戦したものだ。責任感が決勝戦までのぼらせたのだ。

[エピローグ]

全ての戦いは終わった。競技得点62.5点、参加得点10点、合計72.5点は第43回大会で京都府が出した71点を僅か1.5点上回る新記録得点優勝。第2位は予想どおり34点で東京都であった。これら予想を大きく上回る成績を達成できたのは、次のような要因が挙げられる。

- ア チームワーク、選手間の結束が固かった。
- イ 指導者と選手の信頼関係が強かった。
- ウ 県連盟の方針を選手が理解して行動した。
- エ 大会経験の豊富な選手が揃っていた。
- オ 練習参加に対し職場及び在学学校の理解があった。
- カ 会場環境に選手が慣れていた。
- キ 期間中の氣勢が他を圧していた。



団体戦優勝、表彰台に立つ安達男子監督

選手等の感想文

安達 剛 (男子監督)

天皇后両陛下をお迎えし、天覧試合として競技会は始まった。これまで、種目総合優勝を目指し長年に亘り所属企業や在学高校、対策本部、県連所属団体のバックアップのもとに強化に励んできた。やるべきことは全てやったと言う充実感を持って、選手一人ひとりを信じて試合に臨みました。期待に違わず9種目中5種目の優勝を始め全種目に入賞し、見事に総合優勝。それも史上最高の成績を獲得しました。

選手と共に味わった感激は生涯忘れることはできないでしょう。長年に亘り御協力、御支援くださった方々に心から感謝と御礼を申し上げます。

深瀬 久男 (女子監督)

『べにばな国体』で我が空手道競技が総合優勝を勝ち得たことは、県連盟役員を始め関係各位の御指導と御声援の賜物と厚く御礼申し上げます。

また、一緒に指導してくれたコーチングスタッフの皆様、そして何よりも限界の力まで出し切って頑張ってくれた選手達に心から『ありがとう』の言葉を送ります。

瀬野 利幸 (主将・成年男子組手)

勝って当たり前、必ず勝たなければと言う重圧を跳ね除け、見事総合優勝することができました。これも偏に、県民の皆さんの絶大なるご声援と官民一体となったバックアップのお陰と感謝しています。

これからは、この国体の経験を活かし、後進の指導に少しでもお役に立ちたいと思っています。

飛鳥 康弘 (副主将・成年男子組手)

10月7日本県チームの総合優勝で幕を閉じた。優勝ビールかけでボルテージは最高潮に達した。大学卒業後の8年間、途中何度も挫けそうになっては瀬

野先輩を始めチームの仲間に励まされ、選手として出場できたことは感謝の気持ちで一杯でした。試合は無我夢中で内容は殆ど覚えていないが、この大会が自分の人生に大きな自信となったことは確かだ。

今後は、この体験と感激を生徒に託し、山形は空手の強い県であると認めて貰えるよう指導を中心に活動したいと思う。

吉田 俊英 (少年男子組手)

地元開催の『べにばな国体』では、皆様のご協力とご声援のお陰で第2位を勝ち取ることができた。

国体が近づき練習も厳しくなりとても辛いと思いましたが、その時に投げやりにならなかったことが入賞につながり、自分でも良い思い出をつくることができました。皆さんありがとうございました。

西掘 裕子 (少年女子型)

日本一になるのが子供の頃からの夢でした。その夢を果たすために、何人もの先生方からご指導を頂きました。そのことを何時も念頭において、辛いと思うこともありましたが練習に励みました。

山形県代表の1人として決勝戦に進出し、全校応援とあってプレッシャーもすごくかかった中で、自



中量級優勝、表彰台の斎藤選手



競技の様態と報道陣（組手重量級決勝戦から）

分の思いどおりの演武ができ優勝しました。高校生最後の試合で日本一になり、良い思い出ができました。これからもこの経験を活かして頑張ります。皆さん本当にありがとうございました。

今後に向けて

べにばな国体は無事終わったが、可能な限りを尽くし、絶好調と言っていい体調と集中力を持って臨むことができて幸いでした。この陰には多数の関係者、支援者の理解とお力添えがあったことを決して忘れてはならない。

これらは、連盟組織の機能発揮が最も重要と位置付け、成功のため総力を結集したことが成功に導いたと判断しており、組織力の勝利である。

この間の体験は、私たちに取って貴重な財産となり、今後の競技力向上に必ず活用されることを強く念願している。

ベテランの選手の引退もあるかも知れないが、次代を担う人材も次々と出番を待っている。今回のように能く己を見詰め、責任感旺盛に練習と自己鍛練に取り組むならば、前途は必ず明るく開けるであろうことを確信している。

県連盟は、今後も各年の国体における多くの入賞獲得は勿論のこと、併せてジュニア層の拡大と充実に力点を置き、普及活動がより活発になるよう、先導役として倦まず弛まず歩むことを誓う。



型試技選手
佐藤 規行
山形スリーエム



型試技選手
佐々木智佳
新庄コンピューター専門学校



型試技選手
白鳥 佐知
東海山形高



選手達をご指導下さった
コーチングスタッフ

